

# メガテン3 リメイク発売記念に

肉まんが死んで僕が生まれた

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

メガテン 3リメイク記念

# 目次

メガテン3 リメイク発売記念に	1
人修羅の話1	4

### メガテン3 リメイク発売記念に

「……………ああああああああ」

異界と現世が交わる街、ヘルサレムズロット。大崩落から数年、<sup>ニューヨーク</sup>紐育と呼ばれた街は今現在、魑魅魍魎が跳梁跋扈する地球で最も危険な場所と化して居た。

「ああああああああ……………つと、ふう、やっと着いた」

そんな街にまた一つの異物が現れた。

「……………にしても。建物とかは見覚えある……………けど、なんかそれ以上になじみ深い生物異形が見える、いや実際には悪魔ぐらいしか見た事ないけど」

ソレは少年の形をしていた。便宜上少年と言おう、少年の服装はスニーカーと膝程のズボン、全身に青白く光る菩提樹を模したような刺青……………そして、首の頸椎から伸びる黒いトゲ。

「やつぱ、あの移動は堪えるな。行った事のない場所にはアマラ経絡じゃないといけないっつーのが面倒……………つと、そうだった。来い、ピクシー」

少年が手を振るう。そうするとイナヅマが走り煙が上がる。煙が晴れるとそこに居たのは、青いレオタードに赤い髪をした小さな人間が現れた……………薄い羽を生やしているが。

「んんん、つと！ やつと着いたのね！ 人修羅！」

「おう、待たせて悪かったな相棒」

へーい、とハイタッチを交わす二人。ピクシーに人修羅と呼ばれた少年、本名を間雑シン。彼は普通の人間、だった。

「さて、『大いなる意志』の力が弱まっている世界つつう事で来たが……………どうだピクシー？」

「ん？ わっかんない！」

「そらそうだ」

アツハハハハと笑い合う二人、陽気な雰囲気を出している二人だがこの少年と笑い合うピクシー、可憐な容姿とは裏腹にその身に秘めた力は妖精の範囲に留まら無い核爆発並の力を持っている。

そして人修羅だが、彼は一つの世界と引き換えに誕生した悪魔。その身に宿っている力は、悪魔の中で言うのなら頂点に類するモノである。

「ま、いい感じに息抜きしてくか。ピクシー、お前は どうする?」

「ん! なら私も自由にするわ、この世界ってキラキラしてるし面白そうなものがいっぱいありそうだし、他の子もそうするの?」

「……そうだな、えーと、ティターニア、パールヴァティー、クー・フリーンは良いとして」

シンは辺りを見渡す。

「ギリメカラとアラハバキも……行けそうだな。よしお前ら出てこい」

瞬間、雷鳴が五つ。街中でそんな音が鳴れば誰もが振り向くと思うだろうが、ここはヘルサレムズロット。爆音と悲鳴がBGMのこの街で気に止める人などそうはいない。立ち込める煙が晴れるとそこに居たのは、三つの人影と二つの異形。

「……好き、好き、シヴァ好きよ、ってアラ、人修羅君どうしたの?」  
最初に声を発するのは赤とピンクを基調とした服を着た女性、パールヴァティー。

「あらあら! 戦闘……じゃ無いみたいね」

緑のドレスに金の髪、エルフのような容姿に羽を生やしたのは、妖精の女王、ティターニア。

「召喚に応じ参上致しました。真名をクー・フリーンと申します……コレやってみたかったですよね」

どこと無く残念な雰囲気醸し出す青いラインと白い鎧をまとった、槍を持った青年、クー・フリーン。

「……」

クルクルと陶器の体を回す、縄文土器の様な身体をした、アラハバキ。

「お、大将! 乗ってくかい! ……ってアレ?」

勢いよく仕事だと力を入れて、アレ? となる一つ目の象、ギリメカラ。

「はいーい！ 皆さんにこれから自由行動を許可します！ 尚、俺がピ  
ンチになったら遠慮なく呼ぶし、お前らもやばくなったら連絡な、あ  
と俺らの使命はこの世界で『大いなる意思』の力を弱めた原因を見つ  
ける事、回収ができれば其れの回収な、以上。質問ある？」

シンが声を上げる。

「無いみたいだな、帰る時は最近女装が趣味の閣下から連絡来るだろ  
うし息抜きついでに使命を果たしてほしい」

からからと笑いながら手を振るうシン、ちなみにピクシーはシンが  
他五体を召喚した時点で既に場を後にしている。

ピヨンとビルの屋上から飛び降りるシン、彼には目的はがあった、  
彼が悪魔になってから今までずっと探し求めていたものを探しに。

「……上着、破れ無い上着がこの世界で見つかるの良いなあー。受胎  
の時に失くして見つけたらボロボロだったし……なんでこのズボン  
と靴はいまだに無事なんだろうか……」

人修羅は上着を手に入れる事は出来るのか？ 突如自由を与えら  
れた五体の仲魔、彼らは何をするのか、そしてピクシーは何処へ？

混沌王とその仲魔たちがヘルサレムズロットに何を起こすのか、ソ  
レはまだ誰も知らない。

「私とシヴァ様のらぶごめを異界の者たちにも広める、その為には  
……この街にいるらぶわーを持つ人を探さないと……」

「何しようかしら？ ダンス、ステップ、オールナイ？ 野獣の様な殿  
方とラブなロマンスを試してみたいわ♪」

「え、アレ？ ちょっと待ってください！ 私の自由とか完全に拷問  
潰けにされ、あ、し、ししよあああああああ!!!」

「……」 キュピーン！

「……………え、オイラに言ってるのか？ 別に乗せんのは構わねえけ  
ど………本当のアイドルになる？ なんのこったよアラハバキ……」

「キラキラ！ 沢山！ きゃはははは!!!」

「服……取り敢えず何でもいいから着たい」

まだ、誰も知らない。

## 人修羅の話1

「おいおいおい！ コイツア笑えるぜ！ なんだてめえは、追い剥ぎにでもあったのか？」

「「ぎゃあはははははははは!!」」

「……………」

ヘルサレムズロット  
「……HLでは追い剥ぎ、カツアゲなど日常茶飯事であり絡まれる確率は150%、ちなみに50%はカツアゲにあった後にもう一度絡まれるという事である。」

「可哀想な刺青のヒューマン。その身なりで金がねえ事はわかっていゝる。だから……ちよ——と、内臓を売ってくれや。断ったら、殺してから奪うがな」

そう言う、三人の異界存在。それぞれ赤、緑、青の肌色と人間の倍近い体格をしており、それぞれ強靱な爪、牙、拳を備えている。彼らはカツアゲ集団の中でも臓器をぶん取る、人間からしたら最悪な相手であった、が。

運が悪かったのだ。

「おい、てめえ、何ずっと黙ってんだ?！」

「ビビって声でねえんだろうよ、つうか、もうバラしてよくね?！」

「それもそうだな。お前も運がねえな、ま、早々に臓器を手放しとけば命まで取らなかつたつてのに、早く答えねえお前の自業自得つて奴だ」

「……取り敢えず、お前ら黙れ」

絡んだ相手が人修羅でなければ、彼らも無事で済んだだろうに。

「取り敢えず、パーカーは手奪いに入取れたけど……」

幾らHLであっても、半裸は目立ってしまう。その為、人修羅は得意脅の取引によって取り敢えずの服を手に入れた。が、サイズがデカく、地面に引きずつてしまっている。

「なあ、お前ら。ここいらで何か異変とか起きてないか？」

「へ、へえ!」

人修羅の質問に答えるのは先程の異界存在。それぞれ爪を割られ、牙をへし折られ、拳を砕かれた彼らは、人修羅の前で正座で座っている。真つ先に声を発したのは人修羅に服を剥がれた奴だった。

「い、異変と申しましても、ここHLでは異変が日常茶飯事といいいますか……」

「うーん。ま、だろうな。じゃあアレだ、コイツは強い、ヤバイって奴いるか?」

人修羅の経験上、こういつたチンピラが知っている人物と言うのは大抵大物であると言う事が多い。彼も昔、ボルテクス界で、そこら辺の悪魔から強い悪魔の情報を聞いて回ったものだ。

「そ、それでしたら。ザップ・レンフロつうヒューマンがいますかね」  
「ザップ・レンフロ?」

ザップ・レンフロ。彼を知る人から、度し難い人間のグズ、シルバースット S Sと散々な言われようをする人物であり、薬、暴力、S O Xの三要素でできていると言っても過言ではない存在である。

「……ま、取り敢えず、情報はそれだけでいいや。コレは貰ってくぞ?」

「二え、俺たちの財布……」

「命よりは、安いよな?」

「二どうぞ、持って行って下さい」

路地裏に背を向け街中へと向かおうとする人修羅、しかしその背後にいる三人が、人修羅の視線が離れた事を確認した瞬間にそれぞれの身体がドロドロの液状に変化し始めた。

それぞれが混ざり合い、一つの異界人へと変貌する。白い肌を持ち、その体格はゆうに10メートル程にまで膨れ上がった。

『油断しやがって、しいいいいいねええええ!!』

無防備に背を向けている人修羅に対して、拳を振り下ろした、何度も。その威力はコンクリートを粉碎し、ただの人間が食らえばミンチになってしまうだろう。

だが、重ねて言うように相手は人修羅である。もう一度述べるが、



彼らの不運は、絡んだ相手が人修羅だった事である。

拳は人修羅に直撃した、それは間違いない。

『は、はははははは!! 死ぬ、シネ、sineeeeeee!!』

瞬間、白く強靱で巨大な異界人は、逃れられない死を自覚した。

「……一度目は、服と情報、後、金で手を打った。打ってやった」

ゆっくりと振り向く人修羅、その両の手には煮えたぎる炎が存在した。

「俺は、交渉する時に騙すってやり方が大っ嫌いなんだよ。背後からの攻撃もな……」

人修羅の刺青が青く光り輝き、その滾る生命力を極大の炎を宿す魔力へと変えていく。

「そう言った手合いの相手は何があらうとぶちのめすって決めている」

「だから……」

両手を頭上へ、そして重ね合わせ万象を燃やす炎が生まれ、白い異界人へと放つ!

「消え失せろ」

それは、火山の爆発。全てを飲み込み焼き尽くすマグマの如く放出される。その技の名は『マグマ・アクシス』

異界人を焼き滅ぼすだけに留まらず、その炎は路地裏そのものを融解させ大通りと言っているほど広くしてしまった。そして何より

……

「……あ」

人修羅が異界人から奪い取った服も、金も燃やしてしまったのだ。

「……あーどうすつかな。人、集まって来るよな?」

むむむ、と腕を組み悩み、うーん? と唸りながら辺り見回す人修羅。辺りは融解し熱を放つ壁や道路だったものだけである。

「取り敢えず、ここから離れよう」

人修羅は逃走を選択した。

「んで、陰毛頭……ここが事故が起こつたつう現場か？」

白いジャケツトを着こなした褐色の男……ザップ・レンフロ。

「誰が陰毛頭だ！　たく、なんでこの人と一緒に調査しないといけないんだよ」

ザップに対してツツコミを入れる男、名前はレオナルド・ウオッチ。彼らは、秘密結社ライブラの一員であり、とある調査をライブラのスカーフエイズことステイブ・A・スターフェイズにお願ねがいされて調査に来たのだ。

『少年に頼みたいのは、その目で事件現場を確認して欲しい。なんでもありのHLとは言え、単純な熱による建物の融解と言うのは珍しい。もしかしたら何か大きな事件、例えば兵器の密売みたいな物の先触れかも知れない。なに、ザップも護衛につけるから安心したまえ』  
『は!?!　なんで俺がそんな面倒を『ザップ?』行かせて頂きます、オラいくぞ陰毛頭!』

こんなやりとりがあつたとか無かつたとか。

「いやーにしてもヒデエなコリヤ、どうやったらこうなんだ？」

「何がですか、ザップさん？」

現場を見て口を開いたザップにレオナルドは問いかける。

「単純に火で焼いたなら焦げ跡が残る、それがねえから熱で溶けたつうのは本当だ、もし熱の発生源が火だった場合……ししよっ！」

説明の途中で、辺りを見回すザップ。額からは滝の様な汗が噴き出ておりとてつもない焦りを醸し出していた。

ザップの唐突な鬼の形相にピクツと身体を固まらせるレオナルド。  
「……し、師匠並の火力が必要だろうな、とは言え俺も全力出せばこれくらいはできるが」

「そうですね……もしこれが起きた原因が兵器なら、ザップさん並の火力が出せるって事ですな」

「勘違いすんじゃないねえ！　熱だけでこの現場作るんならつうだけだ」  
ボカツとレオナルドの頭を殴るザップ、レオナルドはそれに対して「イテテ」と言いながら、現場をその目で見る。

神々の義眼、凡人であるレオナルドが超人だらけの秘密結社ライブ

ラに居られる、超ド級の眼である。音速で動く猿を捉える動体視力、僅かな痕跡を見逃さない天体望遠鏡よりも優れた解像度、そして何よりも驚くべきはその目で見えぬ物は無い事、本来知る術の無いブラッドブリード血界の眷属の諱名いみなさえも読み取るのだ。

「……ザップさん、この現場作るのには全力が必要って言ってましたよね。もし、その全力を出したらザップさんどうなりますか」

「だーかーらー！ 似た様な現場だったら本気出さなくとも……」

ザップはレオナルドの表情見て、またも振り上げた拳を下げた。レオナルドが表情に浮かべた真剣さ、何より焦りがそうさせたのだ。

「……ここら一帯が熱で融解する程の火力を出せば、一週間は疲労で碌に動けねえ」

「なら、もしですけど、そんな事を個人で行つといて、鼻歌混じりで歩いていく事ができる人ってどんな人ですか？」

「……そんなん、師匠くらいのもんだ」

レオナルドはその場に残ったエネルギーの残影を見ながら、口を開く。

「ヤバいのが今この街にいます、もしかしたら血界ブラッドブリードの眷属よりヤバいのがー！」